

成蹊會誌

1986 · 12 no.64



成蹊学園近況

(成蹊学園
総務課提供)

大学の近況

◇父母懇談会

昭和六十一年度の地方会場での父母懇談会は、別表のとおり東日本地区三会場で開催されました。

懇談会には、学長、学部長をはじめ教職員の責任者が出席し、成蹊大学の現況説明、学部の説明、個別懇談、就職相談、学長との個別懇談等が行われました。対象父母の六割が出席した会場もあり、各会場とも盛況のうちに終了しました。成蹊大学の一年間を紹介したビデオも放映さ

れ好評でした。

また東京地区(東京・神奈川・埼玉)の父母懇談会は、とりあえずの試みとして、今回は経済学部・工学部の二学部において経済学部は二年次生を、工学部は二・三年次生を対象に、十月四日(土)本学において開催されました。当日は二会場にわかれ、それぞれ学長、学部長、学科主任ほか多くの教職員が出席し、大学の全体説明、学部・学科の現況説明の後、個別懇談が行われました。多数の父母が参加され盛会でした。

父母懇談会実施状況

開催日	開催地	会場
六月二十一日(土)	新潟市	ホテル新潟
七月五日(土)	仙台市	ホテルリッチ仙台
九月六日(土)	松本市	松本東急イン
十月四日(土)	武蔵野市	成蹊大学

◇成蹊大学

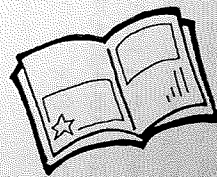
公開講座の開催

今年で四年目を迎える公開講座が、別掲のとおり開講されました。今回は、「国際化」、「高齢化」、「情報化」、「税金」というような、私達の日常生活に密接な関係のあるテーマが用意されました。また文学的なテーマとして、はじめて日本の古典がとりあげられたのが、従来の公開講座とひと味違う内容になっています。

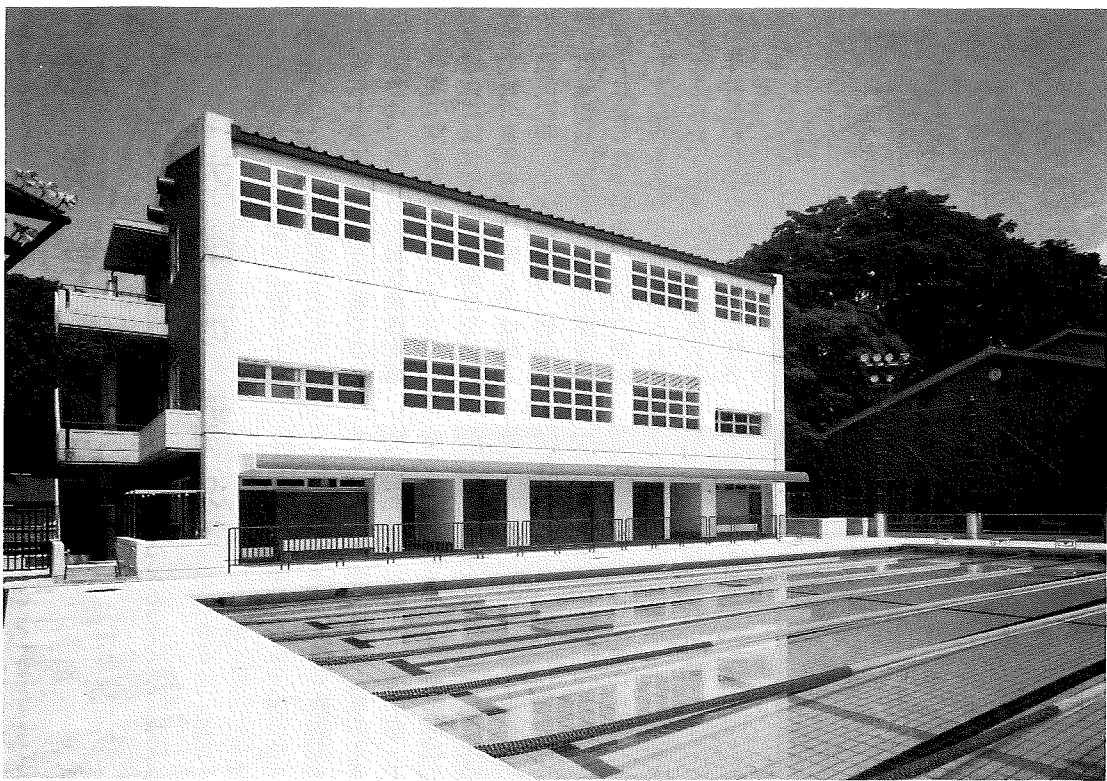
受講者は都内居住者はもちろん、近県からもあり、年齢層も二十代か

ら七十代までと幅広く、各回とも三百名以上の申し込みがあって、この公開講座によせる皆さんの関心の深さが感じられました。

(成蹊大学事務部)



月日	講座名	講師
10月11日(土)	国際化時代と私達	川口浩 法学部教授
10月25日(土)	「源氏物語」の思想	柳井滋 文学部教授
11月1日(土)	高齢化社会の生活設計 — 家計の資産選択 —	上野裕也 経済学部教授
11月8日(土)	情報化社会への対応 — INS、キャブテン、LAN、文字放送等 —	窪田啓次郎 工学部教授
11月15日(土)	市民生活と税金	武田昌輔 経済学部教授



新装なった南プール・南体育館

中学・高等学校の近況

◇国際学級の現場から

中学校では去る九月三、四日、国際学級第一学年の補欠編入試験を行いました。志願者十三名のうち合格した四名の女子生徒を、あらたに成蹊の仲間として迎えたわけでありませぬ。この結果、一年G組は男子八名、女子七名のクラスになりました。

この機会に、海外帰国子女教育の近況について御報告いたしたいと思えます。

最近の文部省の調査によりますと、海外から帰国する児童・生徒は年間約一万人といわれ、現在社会的に大きな教育問題となっています。成蹊中学校の国際学級についてみましても、最近の約十年間の帰国子女とそれをとりまく周辺の環境にいくつかの見逃すことのできない変化がおきており、したがって、それにもなう対策なり、問題の解決が迫られております。

まずその一つとして、帰国子女の家庭層の変様であります。多少語弊のある言い方ではありますが、かつて海外に赴任するのは、企業・官庁

の首脳級の人たちが多かったのが、今や、中堅層の人たちが、国内各地の支店・出張所に転勤するのと同様なかたちで、海外の前線へ出ていく時代であるといえましよう。

次には、赴任先がかつては欧米先進国、いわゆる英語圏の地域が多かったのが、最近是非英語圏の地域が非常にふえて、今やそれが半数に近いということでもあります。

さらに、文部省および外務省の国費による海外の日本人学校、補習校の数の飛躍的な増加、また質の向上ということがいえます。

これらのことから、どのようなことが生じたか、まず言えることは、一口に帰国子女といっても、さまざまであって、多様化がすすんでいるということでもあります。また、帰国子女が国内の子供たちとの違いを縮めつつあるようにみえます。とくに日本人学校出身者にこの傾向が強いうかがわれます。海外の日本人学校は、国内の学校の教育課程に準拠して、海外の日本人子弟を限りなく国内の子どもに近づけようとしているといえます。国内の受験競争、学習塾の横行、偏差値の魔力は海外の日

◇高校部室四号棟の完成

本人の親たちを一層国内志向に駆りたてます。せっかく海外に同行した子弟を外気にあてず、そっくりそのまま国内へつれ帰りたいことを本音とする親たちがふえております。国内では、帰国子女の受け入れ校が小中高大にわたって飛躍的にふえ、近く公立の帰国子女高校の新設すらその準備がすすめられております。しかも、一部の受け入れ校では現地校出身者のみを受け入れることのみきりはじめています。

しかし、問題はそのような一部は受け入れ、一部は受け入れないなどといったことではありません。そもそも「帰国子女」などという言葉があり、したがって「帰国子女教育」が問題になること自体が、よその国にはないことでありまして、地球上日本くらいであることを知らなければなりません。「帰国子女」という一種の差別じみた考えを必要としなくなるような日本の教育をこそめざさなくてはいけないのだと思いません。

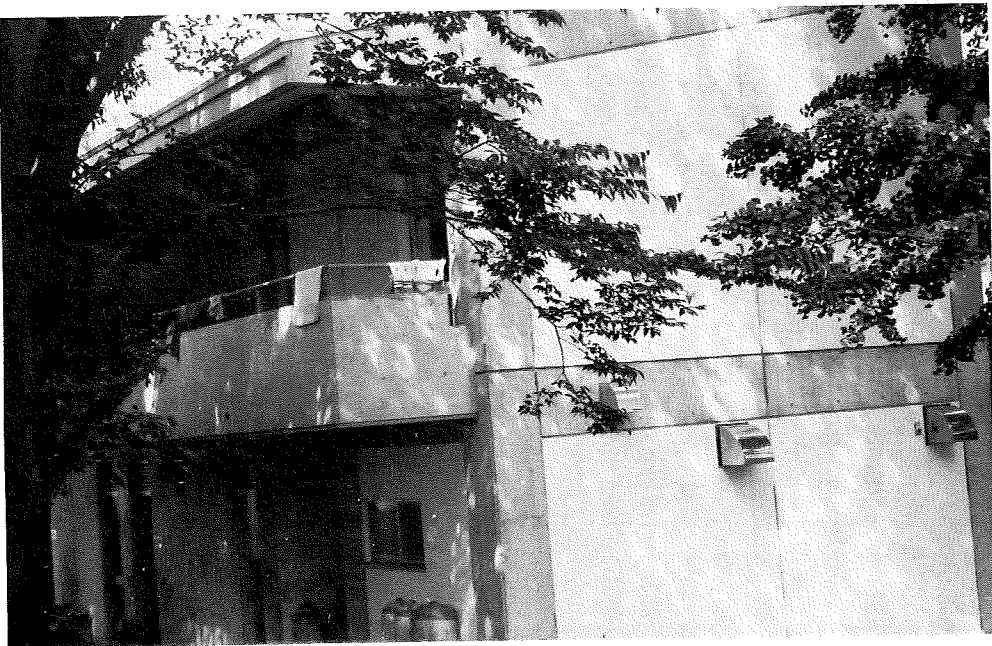
成蹊中学校では、以上のような状況を考慮して、国際学級の在り方をどのように改善していくか、検討をしていきたいと考えています。

高等学校では、十年程前から年次計画によって中高サッカー場北側に部室棟を建設してまいりましたが、

なお、野球部、ラグビー部、サイクリング部などは第一体育館東側のプレハブ部室を使用しておりました。このプレハブ部室は建築以来十五年、六年を経過しており、老朽化が著しく、その改善についてつねづね頭をいためていたものであります。改築場所につきましましては、学園内は広いようでもなかなか適当な場所がみあたらず、検討の結果、第一体育館前東側とすることにいたしました。ここには木造の山岳部部室がありましたが、山岳部には別の部室に移って、今年度早々、四月から建設工事に入り、去る八月十三日新しい部室棟が完成しました。新しい部室棟は鉄筋コンクリート二階建、延一八二・五二八平方米で、一階部分にはサッカー部、野球部、ラグビー部、サイクリング部各部の備品庫とシャワールーム、便所が配置され、二階には百名分のロッカーを備えたロッカーームを用意してあります。従来の部室とことなる点は、それぞれが個別の部室を使用するの

ではなく、サッカー、野球、ラグビーという土にまみれて練習する各部が共同でロッカー室を使用するという型式をとったことでもあります。多少手狭ではありますが、考えていたより機能的で、シャレた感じのする四号棟です。

今後は、これらの部室が生徒たちの学校生活のなかで愛着のある場所として、自分たちの手でいかに十分活用していくか、学校としてもしっかり指導していくよう考えております。



高校部室四号棟

す。
(羽田野孝通 中学・高等学校教頭)

小学校の近況

正課授業「特別学習」の現況と「特学用具室」の新設

規模は大変小さいのですが、ともかく、長年の待望であった「特学用具室」が、この夏休みに小学校体育館東側に新設されました。これを機に、部によっては卒業生の方や学生達が自発的に応援してくださることもある「特別学習」について報告させていただきます。

◇「特学」の性格と現況

五・六年生の児童が、一週間の授業のうち最も楽しみにしているのが、この「特別学習」(略して「特学」と呼ぶ)だと言っても過言ではありません。四年生以下の児童の中には、五年生からの「特学」を待ち焦がれている者さえいる程です。

「特別学習」の名称は、以前はクラブ活動と言っていたものを昭和四十五年度から改めたものです。その意図は、成蹊教育伝統の一つ、個性教育を教育課程にはっきり打ち出すこと、課外活動ではないことを明らかにすることにありました。具体的に言いますと、中学・高等学校の課



外としてのクラブ活動と異なり、週の時間割の中に教科授業と同じように組み入れ、五・六年生は全員「特学」を正課の授業として受けるわけ

です。また、教師の方も、専任は全員この授業を担当することになっています。四十六年度には、各教科の「年間指導計画」に準じて、各部の「特別学習指導計画」を作成しました。こうした経緯と小学校教師の熱望から、四十八年度からは、教員の週担当授業時数として認められました。

小学校には、四年生以上の希望者による受益者負担の「器楽クラブ」がありますが、これは「特別学習」と性格を異にしているものです。「特別学習」の部と「器楽クラブ」を混同しておられる方もあるように耳にしますので、ついでにここに付記しておきました。さて、「特学」の部としては、現在次の十五部を設けています。

- 〈文化部関係〉
- 英語部、朗読部、パズル部、美術部、家庭部、科学部
- 〈運動部関係〉
- 剣道部、サッカー部、ラグビー部、野球部、バレーボール部、軟式テニス部、

硬式テニス部、ピンポン部、陸上運動部

部の設定は、現在は教師側で指導し得るものに限っています。教師の中に、新設したい部、あるいは廃止したい部がある場合は、毎年、職員会議で諒承を得て実施することになっています。

児童の部の所属は、できるだけ第一希望を入れるようにしています。が、いくらか調整せざるを得ない実状にあり、これは、児童にとっても教師にとっても一つの悩みになっています。

授業として全教員が担当する関係上、教師サイドで設定した各部に児童が入るように調整する必要もあり、また、場所・施設・設備・担当教師数等の条件からもその必要が生まれてきます。調整の結果、第一希望通りにならない児童の中には、いつまでもその不満を持っている者があり、私達の大きな悩みになっていきます。何とか、児童全員の第一希望をそのまま生かし、教師の指導意欲も生かした態勢を整えられないかと検討しています。特学を週二回にふやし、児童全員に運動部、文化部両方の活動を体験させる方



が、小学校の段階としては児童の個性の芽を伸ばすことになるのではなからうかと考えたりしています。成蹊小の特色ある教育として今後の研究課題の一つでもあります。

「特学」は正課の授業ですから、各部の必要経費(約二〇万円)は、全て校費から支出しています。課外活動の「クラブ活動」であった頃に

は、現在の中学・高等学校のようにPTAからいくらかの補助を受けていたことがあります。

時間割の上では、「特学」は金曜日の第六時限に組んでいます。授業一時限の単位時間は四十分になっていますが、「特学」に限り、二時半から三時半までの六十分にしています。実際には、下校時刻寸前、つまり四時過ぎまでやっている部(特に運動部に多い)があるというのが実状です。

また、対抗試合を控えると早朝練習(朝練)を行う部もあり、下校時刻を守らないという問題と共に朝の遊び場を奪いかねないという問題が時々起きています。

この「特学」の時、ラグビー、サッカー、硬式テニス、剣道部等は、卒業生である社会人、学生達が、その指導を手伝ってくださることがあります。中には、毎週のように来てくださる方もあり、その熱意に頭の下がる思いがします。中学生・高校生の中にも、下校時に小学校を通り、「特学」をおそくまでやっている部

があると、出身の部に立ち寄って応援したり一緒に活動したりする者がいます。これらも私学らしい情景です。

対外試合としては、現在は次の部が行っています。()は、主な相手校です。

- 硬式テニス(対成城)・ラグビー(対青学、成城)・バレーボール(対青学、成城)・サッカー(対学習院、自由学園)・野球(対学習院、暁星)

また、私立小学校の体育発表会として行われる対外試合に、ラグビー、バレーボール、サッカーの各部が参加し、好成績をあげています。私学陸上記録会には、陸上運動部の児童達も参加しています。剣道部は武蔵野市民大会に出場してこれらの部も好記録、好成績を得ています。

◇夏季合宿教室(四泊五日)

「特学」の部が中心となり、部員でなくても希望者は自由に参加できるようにし、夏の学校に準じて行っています。

(木村定司・小学校長)

昭和62年度 学生・生徒・児童募集案内

学校・学部	募集人員	願書受付期間	入学試験日	合格発表日
大学	経済学部	400名	2月21日(土)	2月28日(土)
	工学部	280名	2月19日(木)	2月25日(水)
	文学部	390名	2月20日(金)	2月26日(木)
	法学部	350名	2月22日(日)	3月1日(日)
高等学校	約110名	1月27日(火)	2月18日(水)	2月20日(金)
中学校	男子 約80名	1月21日(水)	2月1日(日)	2月3日(火)
	女子 約30名	1月24日(土)		

※高等学校海外帰国子女、2年編入、小学校3年編入および国際特別学級(小・中)の入試日程の細目については、当該学校事務室にお問い合わせください。なお、小学校入試は11月4、5日に行われました。

成蹊会報告

昭和61年5月1日
昭和61年10月31日

一、会 議

○理事 会

第95回理事会(61・6・9)

(1) 昭和60年度事業報告及び収支決算並びに剰余金処分案承認の件

(2) 財産目録(昭和61年3月31日現在)承認の件

(3) 成蹊会特別会員(教職員)推薦の件

○評議 員 会

第33回評議員会(61・6・30)

(1) 成蹊会理事選任の件

○会 員 総 会

第31回通常会員総会

(1) 昭和60年度事業報告及び収支決算並びに剰余金処分案承認の件

(2) 財産目録(昭和61年3月31日現在)承認の件

(3) 昭和61年度事業計画及び収支予算案承認の件

○特別委員 会

成蹊クラブ委員会(61・5・28)

育英奨学委員会、学術・教育研究委員会(61・6・2)

財務委員会(61・6・4)

広報委員会(61・7・29)(61・9・24)

○同 窓 会

経済学部委員会(61・6・16) 工学部幹事会(61・7・25)

高校(旧制)委員会(61・6・24) 経済学部委員会(61・8・25)

新学長を囲むパーティ(61・6・26) 高校(旧制)委員会(61・9・2)

経済学部委員会(61・7・9) 経済学部委員会(61・9・8)

高校(新制)委員会(61・7・10) プレメ幹事会(61・9・9)

工学部幹事会(61・7・25)

支部会 千葉支部会(61・7・5千葉市)

昭和六十年(秋)叙勲・褒章受章者

勲二等旭日重光章

渡辺佳英(旧高10年卒) 東京工業品取引所理事長

勲三等旭日中綬章

後藤一雄(旧高8年卒) 東京工業大学名誉教授

紫綬褒章

田丸謙二(旧高18年卒) 東京大学名誉教授(化学研究)

池原森男(旧高17年卒) 大阪大学名誉教授(薬化学研究)

藍綬褒章

石川六郎(旧高20年卒) 鹿島建設会長(建設事業)

大倉淳平(旧高19年卒) 大倉電気社長(産業振興)

久保徳全(旧高19年卒) ウテナ社長(産業振興)

松本俊二(旧高19年卒) 三重県医師会長(保健衛生)

(敬称略・叙勲は勲三等以上・本会調べ)

二、催 事

○第26回日本寮歌祭参加(61・10・4・日比谷公会堂)

○第28回成蹊会謝恩顕彰会(61・10・27・成蹊クラブ)

三、刊 行 物

○成蹊会誌第63号発行(61・6・1)

四、寄 付 金 (敬称略)

○十万円

平塚 保明(旧高1回) 成蹊会50周年記念事業

伊集院 董(旧高12回) 小学校教育基金

故山本克彦(旧高17回) 学術教育基金

○三万円

斎藤 敏夫(政経2回) 学術教育基金

昭和61年12月1日

編集兼発行人 谷岡喜久藏

発行所 社団法人成蹊会

〒180 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

電話 0422・51・2244